特集〈学校恐怖症〉にかかった教師の実態〉

# る〝学校恐怖症〟教師の実態

なから無関心を装って受験指導に熱中する教師たち

有明睦郎（ジャーナリスト）

## 教師の生徒に対する無知

五無主義という妙な言葉が、すっかり八〇年代の初頭を飾る流行語となったようだ。もとはと言えば、今年一月、高知市で開かれた日教組教研集会で、教師が現代っ子に浴びせた新語だが、いまやオトナ社会のあちこちで使われだした。「遊ばず、学ばず、働かず」の「三ズの川」を通り越して、無気力、無責任、無関心、無感動、無作法と、現代っ子たちへの嘆きが延々と繰り広げられたものの、それは逆に、〝だったら先生はどうなの〟と、たちまち教師たちにもはね返ってしまった。

そして今年の高知教研では、教師たちの調査や分析がやたらと目立ち、私自身、「教師たちもいつしか評論家になってきたんではないか」という変な気にとらわれたものだ。

しかし、そんな教師たちの嘆きをよ

# 波紋

## 学校恐怖

そに、子供たちは次々と〝反乱〟を起こしている。「インベーダーで遊ぶ金が欲しかった」と小学六年生の男児が駄菓子屋のおばあさんを絞殺した事件が先日、大阪で明るみにでた。栃木では、小学一年生の男児が三歳の幼女を井戸に突き落とし、死なせた。徳島では、チャンネル争いのあと、中学一年生の男の子が中学二年生の姉を猟銃で射殺。そして山形では中学一年生の男の子が登山ナイフで母親を刺して、「十四歳未満は刑事責任を問われないから」と計画的犯行を自供した。相次ぐ少年たちによる殺人は、親たちを恐れ、おののかせ、卒業式シーズンとともに頻発した校内暴力に教師たちは震え上がった。十年前、学園紛争で揺れた大学、高校でさえ、不思議と教師が殴られることはめったになかったが、いまは小、中学校の教師たちが〝学校恐怖症〟にかかる時代。「学校へ行くのが怖い」と〝登校拒否〟するノイローゼ教師が増え、その一方で若者たちは教師という職業に憧れて採用試験に殺到している。いったい、どうなったの、といまさらながら教育の荒廃を叫んでみても、虚しくなるだけだ。

「校内暴力は私たちの教育に対する生徒たちの告発と受け取っています」今年二月のある日、大阪市内の某中学校の校長は、長かった校内暴力との闘いをふり返りながら、警察、PTA、学校の三者が集まった反省会の席上、こうあいさつした。この中学校では、昨年夏から秋にかけて約三ヵ月の間に、暴行、傷害など六一件もの事件が続発、大阪府警少年課が捜査本部を特設して〝非行壊滅作戦〟を展開し、この日やっと、捜査に一応の終止符を打ったのだ。この間、暴行などで送検されたのは、三年生ばかり二九人。校長は痛切な声で続けた。

「学校が生徒に反省を促せば、生徒はさらに反発して悪循環の繰り返し。教師の生徒に対する無知と鈍感さを思い知らされましたよ」

### 教師に対する暴力事件

この事件の経過を簡単にたどってみると、校内暴力が多発しだしたのは、二学期が始まった昨年九月。三年生にとっては、進路指導が行われる一番不安定な時期でもある。三年生約三〇人が、教室の窓をたたき割りはじめ、教師たちになにかにつけくってかかった。彼ら自身、二年生当時、上級生から〝花の応援団〟まがいに理不尽なま

でにいじめぬかれた被害者だっただけに、「今度は、オレたちが暴れる番だ」というウサ晴らしも兼ねていた。

しかし、学校は生徒の非行に厳しい態度で臨んだ。その春、卒業式を控えた三年生が教頭に傷害を負わせたり、校門前のパン屋に「警察に通報した」と邪推して火炎ビンを投げつけたりしたことで、生徒指導のベテランの校長が、非行防止という周囲の期待を背負って乗り込んでいたからだ。

「割ったガラスはきちんと弁償させる」「非行は一つなりとも見逃すな」と教師たちは生徒の個別指導を徹底、家庭との連絡体制を強化し、再発防止に全力をあげた。

ところが、生徒たちは「なんで俺たちだけをとがめるんや。卒業生も同じことをやってきたのに黙認していたやないか」と猛反発。教師が父母と連絡とりあっている姿が、彼らの目には「汚ないぞ、すぐ〝密告〟しやがって」と映ったのだ。十月には、授業中の体育担当教諭(二五)を廊下に呼び出して〝密告〟を理由に襲いかかり、一週間のケガをさせた。十一月には、授業をさぼっているのを注意した社会科担当教諭(五〇)の顔を殴り、二週間のケガを負わせた。

さらには「実力テストでカンニングしたとき、わざと間違った答えを見せたやろ」と同級生にも因縁をつけて暴行する始末で、校内暴力はしだいにエスカレート。教師たちは、生徒の仕返しを恐れ、再び授業中の暴力を黙認、窓ガラスも百枚以上割れたままの状態が続いた。そこで府警少年課は十一月末、異例の捜査本部を設置、リーダー格の三年生五人を逮捕するとともに二四人を検挙、六一件の事件を摘発した。この内訳は、暴行が三二件と約半分を占め、残りは窃盗、器物損壊、傷害、恐かつ未遂など実にさまざまだ。教師に対する暴力事件は一九件にものぼり、女の先生を含む教師一一人が乱暴を受けていた。すさまじいまでの荒廃ぶりだった。

逮捕された五人は、いわゆる低学力の〝落ちこぼれ〟組。警察官には「先生に注意してもらいたかった。いつも無視されているから」と、学校生活の寂しさを訴え、これを聞いた教師たちはただ絶句するだけ。この事件、特異な中学校の極端な例とはいえない。一昨年、大阪の私立高校では、長髪規制に反発して生徒たちが集団で教室のガラスを割る事件が大流行し、一〇六人もの大量検挙者を出す学校もあったが、いま校内暴力の舞台は中学校が圧倒的。東京では昨年一年間に生徒から暴力をふるわ

＊先さまに〈選ぶ楽しさ〉を贈る
大丸の商品券
9都の大丸をはじめ岡政(長崎)小田急百貨店(東京)米子ストア(米子)大丸ピーコック(大阪)各地のピーコックストアおよび松坂屋5店に共通いたします
大阪・東京
大丸
京都・神戸

れた教師は六六人（中学校五八人、高校八人）で、前年の二二人に比べ三倍に増えている。また教師への暴力で検挙、補導された生徒数は一三六人（うち中学生二八人）で、前年（三七人）の四倍にも激増。しかも、警察に届け出があったのは氷山の一角で、表沙汰にならない暴力やいやがらせは底知れない。教師への暴力が度重なって「身の安全が保証されない限り登校しない」と〝登校拒否〟する教師もザラで、生徒と教師のき裂は深まっている。とはいえ、生徒が「非行」に走り、人生を誤まろうとしているとき、教師がノイローゼで〝登校拒否〟するなんて、どう考えても納得できない。

### 教師の相談例

ある小学校の女教師が「男の子をいじめてはいけません」と女の子を注意したところ、「先生のバカ」と何度もいわれ、「先生はバカではありません」と叫んでいるうち、あまり度重なってとうとう「私は死にたい」とノイローゼ状態になったという。ウソのようなバカみたいな話がある。学校で頻発する暴力事件、受験体制による落ちこぼれ、そして進学競争に遅れをとるまいと必死な教育ママたち、その教師に対する熱っぽい監視と、教師たちのストレスの種は増えるばかりだが、教師をカウンセリングした精神科医たちは「どうも教師の場合、自信喪失からくるウツ

こんなとき便利な
ダイワ キャッシュカード。

日常のお引き出しに…
カード1枚で現金自動支払機から手軽に現金が引き出せます。通帳もハンコもいりません。サイフがわりにご利用を…。

時間外のお引き出しに…
ダイワの外壁に面したキャッシュコーナーやCDマークのコーナーでは、平日午後5時土曜午後2時まで現金が引き出せます。

ご出張やお買物の折に…
お出かけ先で現金がご入用になったときダイワの全店にあるキャッシュコーナーやCDマークのコーナーがお役に立ちます。

給与のお引き出しに…
給与振込制をご採用の場合は、お給料日の朝からカードを使って引き出せます。奥さまもご自宅近くのダイワでどうぞ…。

あなたと明日を
預金も 信託も… 大和銀行

CDマークのコーナーでは設置場所により、お取扱い時間が異なる場合があります。また、日・祝日および設置場所の休業日はお取扱いしません。

状態が多いようです」と口をそろえる。

相談例を拾ってみると、こんなのがある。

「ひょっとして名前を言い間違えて生徒に笑われるのではないか、と出欠簿を読み上げるとき息苦しくてたまらない。授業も、何かど忘れしていないかと、あせってしまい、いつも一方的にしゃべりづくめ。一気に終えてしまおうとしている」(高校教師、男、三〇歳)

「両親とも教師で、いつのまにか私も教師になってしまったものの、これでいいのかと食事ものどを通らない。学校に行かなければ、と思うけど、どうしても行けない」(小学校教師、男、二八歳)

また「学校の廊下を歩いていて突然、生徒たちを殴りつけたい衝動にかられ、自分が怖い」と、強迫観念にかられている中学校教師の訴えもしばしばあるという。しかし、教師の精神疾患やノイローゼの増加で各教育委員会とも弱っているが、その対応は難しい。教師のカウンセリングを実施しているのは、東京都教委の教育相談室や、大阪教職員互助組合が昨春設定した〝心の病気〟専門の「健康相談室」ぐらいなものである。

大阪府教委の調べでは、府立学校教職員の休職者の半数近くが精神疾患で占めている。四十九年度で休職者(三カ月以上の病気欠勤)三四人中精神疾患は九人だったが、五十一年度は三四人中一六人、五十二年度は三三人中一七人と増加。五十三年度は三三人中一一人で府教委は「最近、精神疾患の病名で届け出るのを避け、高血圧や内臓疾患など他のストレス病の病名で休職しているケースが目立つようだ」と話している。

このほか、三カ月未満の病欠者や、有給休暇の範囲内での〝登校拒否〟など、表面化しないノイローゼ教師はかなりの数にのぼるという。軽度のノイローゼの場合、精神科医はもっぱら、教師を教室に復帰させて治療しようとするが、校長は生徒や父母との板ばさみにあいオロオロするばかり。

また、教室内に〝宇宙人が侵略してきた〟とわけのわからないビラをはりめぐらしたり、授業中に突然、突拍子もない歌を歌い出し、生徒がびっくりして職員室に駆け込んだりした深刻な例も少なくない。特に精神病は本人の自覚症状が乏しいだけに、学級担任や授業から外れるのを拒否したりするのでやっかいだ。結局、学校間で転校させて持ち回ったりするより方法がないという。

こんな教師たちの精神疾患について、府教委教職員課は「精神分裂病など狭義の意味での精神病は、他の職場に比べ比率が高くはありません。ただ、教師は一般的に責任感が強く、いろんな理由で責任が果たせないと、不安感やイライラがつのり、ノイローゼになる人は多い。教師は休日も多く、

比較的趣味を持ちやすいので、これまでストレス病は少ないとされてきたんですが……」といい、精神疾患の増加傾向に注目している。だが、いま、なによりも問題なのは、この〝教育過剰〟の社会の中にあって、教師だけ相談相手がいないことかもしれない。

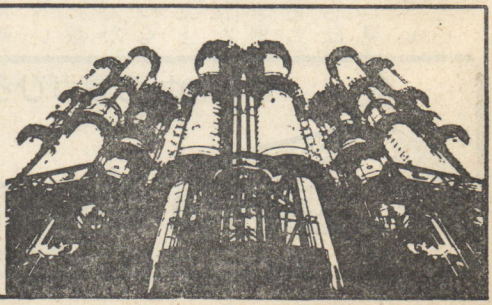
「一日中、教室の中にいるし、タクシーの運転手とあんまり変わりませんよ」という小学校教師がいたが、教師には〝一国一城〟の主という気持が強い。同僚とも心を割って語り合えないという体質もある。まして生徒から先生と呼ばれ、父母から〝聖職者視〟されるだけに、ヘタに悩みは打ちあけられない。「教師が教育委員会や上司に相談を持ちかけようものなら、不適格者のらく印を押される。教師だから、という特別視が精神疾患の早期発見の障害になっているし、とにかく、悩みの相談にのることが、そのまま治療になってるんです」と、健康相談室の臨床心理士、福永知子さんはいう。

## 生き方のあいまいさから

この相談室は昨年三月に開設し、今年二月までの相談件数は七〇数件。PR不足もあって相談者は少ないが、内容は躁うつ病、不安神経症、ヒステリーなどいろいろ。若い相談者のほとんどが男性で、中学教師が半数以上。福永さんは「まだ相談例が少なく、正確なことはいえませんが、どうも柔軟性に欠け、気の弱い優等生タイプの教師が多い。特に中学校では、進路指導や生活指導の重圧感が強くのしかかっているようです」と指摘している。

また長年、登校拒否児の診療にあたってきたという同相談室の精神科医は「残念なことだが、教師の精神疾患は増えています。先生たちにもっと気軽に相談に来てもらいたいですね。その反面、周囲の人たちが教師を連れて来させると、一種の〝思想鑑定〟にもつながりかねず、教師の場合は特に難かしい問題がありますし」と顔をくもらせる。「いまの世の中、人間が人間を教育するのは困難な時代です。ある意味では、ノイローゼになるのは良心的な証拠で、それ以前に無関心を決め込んで生徒を切り捨てている教

新しい時代に応える
千代田の
エンジニアリング
産業と環境の調和をめざす総合プラント・メーカー
千代田化工建設
横浜本店 〒230 横浜市鶴見区鶴見町1580番地 電話 045 521-1231



師のほうがたちが悪いのでは。ほんとは、ここによう来ない教師のほうこそ問題なんでしょうけど……」

とはいっても教師の悩み、カウンセリングだけではとても解決できそうもない。

なんだかんだいっても、教師はやはり「自信」に満ちた存在であってほしい。それなりの人生観、世界観に裏付けられた「ゆるぎのなさ」みたいなものがなくて、どうして生徒と向きあえるのだろうか、という気もする。

価値観が乱れている今日、何が本物かを言えなくては教育なんてできないし、教育はいわば教師と生徒との〝人生論のぶつかりあい〟でもあるからだ。生徒の前でひるむ教師たちの自信のなさは、どうやらその生き方のあいまいさからきているともいえる。

「なにをしても態度があいまいで、といって、生徒にゴチャゴチャ言ったり、権力に寄りかかってる教師が生徒にねらわれているようです。自分の考えをはっきり言う教師は、案外と評価されていますよ」と、生徒指導のベテラン教諭はいう。「そうはいっても、最近、問題の生徒が気に入らない教師を殴るだけではすまない。乱暴する生徒の層は成績に関係なく、ぐんと広がりはじめ、おろおろする教師はバカにされるばかり。いつになったら非行がなくなるのやら、まるでサイの河原に石を積むような感じです」。非行はまた、どう生きたらいいのか、という生徒たちのいらだちの表現でもある。

兵庫県下のある調査で、生徒に殴られた教師に多い教科は「数学」と報告されていた。「数学」に象徴される〝抽象思考型〟の先生が、いわゆる〝具体思考型〟の多い非行生徒たちからいっせいに〝復讐〟を受けている姿が思い浮ぶ。小、中学校の教科学習はひたすら〝抽象思考〟を要求し、それが苦手な生徒には教師に「いじめ抜かれた」といううらみがこもるのも当然である。

昨春、兵庫県のT市で、卒業式の翌日、教師を袋だたきにした生徒は、逮捕されたあと悪びれずに「あの先生は、いつもオレたちをバカにしていた」と動機を語っていた。殴られた教師には、そんなバカにしたつもりはなかったというかもしれないが、教科学習でほめられることのない彼らは常に教師に「見下ろされていた」と感じていた。

しあわせの夢がひろがるお買物
井筒屋
小倉・八幡・博多・久留米・大牟田・飯塚・宇部

学校からの呼び出しを受けたある父親は「教師は、家庭でしつけをきちんとやってくれというだけ。成績が悪いにもかかわらず、教えてやってるんだ。という態度がありありなんです。どんな生徒であれ、自分たちがいったん引き受けたのだから、君たちといっしょにやろう、というところも見せていいじゃないですか」とカンカンに怒ったものだ。

しかし、教師は、なにより、〝質のいい〟生徒が好きなようである。有名校で教えているだけで、自慢している教師があまりにも多すぎるのも事実だ。

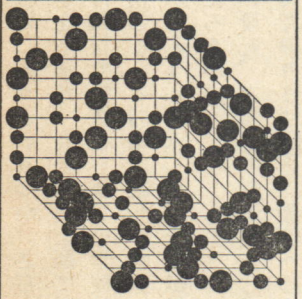
## 事なかれ主義が横行

また教師の約三割が「家庭の無理解で、現状では手に負えない」と投げやりの姿勢を示し、指導放棄の傾向すらある、という調査（七九年三月三日付、毎日）があった。日本教育会（森戸辰男会長）がまとめたものだが、小学校教師の三人に一人が、非行問題は「手に負えない」、「学校教育の枠外」と逃げ腰だったという。細やかな愛情を注いで非行の芽を摘み取ることが期待される女教師たちが、早々とあきらめ顔では、父母はたまらない。年齢別では、若い教師ほど生徒指導を放棄しており、指導上の問題では、「学校体制」「教職員の研究不足」など学校の内部努力よりも、「家庭の無理解」「教育課程過密」「受験体制」など学校外に求める率が高く、どうやら教師は、自分のことを抜きに他人に転嫁する傾向が強いというのだ。

大阪・貝塚市は昨年、生徒指導の際、生徒に暴力をふるわれた教師に見舞金を支給する制度を発足し、話題を呼んだ。吉道勇・貝塚市長は「真剣な指導に取り組んでいる先生が殴られ損になったら、みじめすぎる。生徒が教師に乱

化学、
価値の創造。

人間社会の進歩・発展はとどまるところを知りませんが，これを可能にするのは，現代化学による技術革新，といってもいいでしょう．デンカは，総合化学企業のワイドな技術を結集，多様化・高度化するニーズを的確に把握，生活に真に価値あるものの創造をつづけます．



チャレンジする化学
デンカ
電気化学工業株式会社
東京都千代田区有楽町1-4-1　郵便番号100
電話 03-507-5071（広報課）
プラスチック
合成ゴム
化学肥料
カーバイド
合金鉄
セラミックス
セメント

暴したり、学校行事でケガをした生徒の家族が先生を訴えるなど、学校事件の続発でこのままでは教育現場に事なかれ主義が横行するばかり。非行に取り組む教師に対し自治体なりの〝誠意〟を示したものだ」と説明するが、「見舞金を出すから、がんばれ」といわれてやれる教育に、どれだけの効果が期待できるのだろうか。

それでなくとも、いまや教師という職業の人気は絶大。教員養成大学の競争率は高まり、入学すればしたで、教員採用試験が急に難関になって卒業後が大変だ。「螢雪時代」まがいの受験情報誌が発行され、教職志望者のためにわざわざ教員採用試験の公開模試まで実施され、受験者が一万人を越えているという。幼ない頃から試験に追われ続けた〝偏差値世代〟にとって、教師になるにも、自分たちの学力がどのへんなのか、という偏差値が気になるらしい。受験技術ばかりが達者になった若者たちが、教師になって、何をどう教育しようというのか。さらに一般大学を卒業後、会社勤務を経て、通信教育課程で資格をとり、小学校教師を目指している〝転向組〟が殺到しているが、どうしてみんな、子供が好きなのだろうか。

「最近、志願者の質が向上し、大変喜んでおります」と、教師への人気を歓迎しつつも、ある教育長は首をかしげていった。「とにかく子供が好き、とやたらと童心を賛美する教師志望者が少なくありませんよ。それを聞いていると、オトナ相手の仕事は自信がないのか、と言いたくなります。むしろ教師は、オトナ社会でも立派に通用する人でないとダメなんですが……」

若者たちの全てが、幼児に戻りたがっているという気はさらさらない。しかし、健康相談室の精神科医は「教師は人間を相手にする仕事でありながら、人間づき合いがヘタで、若い教師ほどなぜか自閉的な〝雑人症〟が増えているんです」と指摘し、生徒指導のベテラン教諭ほど「若い先生は、落ちこぼれたゴンタと、どうつき合っていいか。そのすべを知らないようだ。生徒の非行を見ても、生徒に注意する前に、いきなり母親を呼びつけて強圧的な態度にでたり、全く知らんふりしたり、ちぐはぐな指導が目につきます。まして、生徒を自宅に招いたりする先生はいなくなりましたね」という。

## 人間回復の教育

日教組の槙枝元文委員長は、高知教研の冒頭で「人間回復の教育」を叫び「教師は権力に弱い」と批判した。管理体制の強化に伴って、教師たちは自発性、創造性を失って従順になり、学校内には号令主義、命令主義がはびこっているというのだ。「子供の目には〝権力に弱い先生〟が浮び上がり、その先生が子供には権力的に立ち向かっている」と槙枝委員長は述べたが、こ

の教研では、受験戦争、偏差値による輪切り、内申書体制の中で教師自らの〝権力〟への問いかけはほとんど語られなかった。全国から空を飛び、海を越えて高知に約一万一千人も集まり、自分のことをタナに上げて「子供をこう変えた」と朗々と実践報告する教師たち。何ら〝傷〟も受けず、ただ教育実践を報告し、全国各地に再び散っていったかのように見える教師たちのあのエネルギーは一体、どこに向かっているのだろうか。

ちょっと唐突だが、あの高校野球に熱狂的な人気は、学校教育の〝救いのなさ〟の裏返しのように見える。昨夏の甲子園で優勝した箕島高校（和歌山）の尾藤公監督についてこんな記事があった。

《「オレとお前たち（選手）は恋愛しちょるのといっしょ」が最近の口ぐせだが、厳しさと愛情がミックスして、監督と選手は一身同体のようなもの。「タケシ（石井投手）を最後まで信じています。勝つも負けるもタケシといっしょです」。大会中、試合が終るたびにそう言い続けて、春夏連覇した》（毎日新聞）

三十六歳の男と十七、十八歳の少年たちは、愛情と信頼とで、がっしりと絆が結びつけられていた。「恋愛」という人を浮き浮きさせる言葉までが飛び出してくる「監督と少年たち」の世界が、高校野球が魅力の一つになっている。それはいまのニッポンの学校教育の現場に先生と生徒の「恋愛」が失われてきているからかもしれない。

再び、非行問題に戻ると、教師たちは落ちこぼれる子とどれだけいっしょにドブ板の上に立っているのか。日教組も「落ちこぼれをなくし、学力をつけよう」と文部省とともに大合唱し、子供たちを教科学習にかりたてはいないか。受験体制を批判するのだったら、「落ちこぼれっ子」こそ、未来を開く何かがあるかもしれない、という思いをもたざるをえなくなる。むしろ、何の疑いもなしに適応し、もしくは表面だけをつくろっていく子供たちのほうが怖い気がする。教師たちに受験体制に反逆しろとまで言うつもりはない。ただ自らのおろかしさを生徒と卒直に語り合える関係は築けないのだろうか。そんな「自信」もなく、〝学校恐怖症〟にかかったり、無関心を装って受験指導に熱中する教師たちは、やはり子供たちの復讐を受けるより仕方がないかもしれない。